

連載(55) 地域密着を進める
女子大学の人づくり
 宮城学院女子大学 長谷部 弘
 学長

日本の学校教育近代化の歴史において、特に女子教育の分野では、アメリカのプロテスタント・キリスト教諸派の海外伝道事業が果たした役割が非常に大きかったとされています(小松山ルイ『アメリカ婦人宣教師』)。19世紀末から20世紀初頭にかけて日本全国にミッションスクールとして女子校が多く創設された

わけですが、その事業に関わったのが婦人宣教師たちであり、その弱からぬ存在感は、北米ミッション・ボードから派遣された宣教師たちの実に6割以上が婦人宣教師であったという数字からも容易に想像が付きまします。

実は、彼女たちを送り出した北米プロテスタント諸教会自身、さまざまな活動運営を支える上で女性たちの存在を抜きにしては立ちいかない状態が生じており(教会の女性化)、他ならぬその女性たちが遠く日本の地に女性宣教師を送るため、その働きのための資金を募り、祈り、自らの生活の中から献金し、長期にわたって物心両面のさまざまな支援をし続けたのでした。日本に派遣され、女子教育のために献身的に働いた婦人宣教師たちは、そのような自国の教会の無数の女性たち、一般の信徒たちの思いを一身に背負っていたのでした。当時においてさえ見えない事実でしたから、ましてや日本の「受益者」ととって、見過ごされてきた事実だったのではないのでしょうか。

すでに何度かにわたって論じてきたわが宮城学院女子大学の前身、宮城女学校でも同

様でした。初代校長であったプールボー女史の学校運営は、1886年9月から1893年6月までの7年間に過ぎません。在任期間中、彼女の毎日は、朝7時半に出勤するとまず校長として各種事務処理の執務に従事し、その後、平均5時間半の授業をこなすことの繰り返しだったとされます。それ以外の各種「雑事」に従事し、また休日や日曜日には礼拝や聖書学習の指導もありました。なかなか多忙な

宮城学院の女子教育 キリスト教の福音と女性の自立

学校のストライキ」と名付けました。事件そのものは、内村鑑三不敬事件に象徴される

日々だったのではないかと思えます。

その働きの「実」は、6年間の修学期間を終えた第一期卒業生となって現れるのですが、その評価はなかなか微妙です。彼女は、1892年1月、当時5年生であった上級生徒5人を退学処分にはせざるを得ないという事態に遭遇してしまっただけです。半世紀近く後、当時1年生だった相馬黒光は、それを自伝的小説『黙移』において「宮城女



プールボー先生送別会 (1893)

ような排他的なナショナリズムが支配的になる世の中の雰囲気や背景にして発生しました。全国のミッションスクールで生じていた学校の管理運営権移管を要求する日本人スタッフと宣教師スタッフとの対立が宮城女学校でも生じました。そこに日本人教員間の対立が重なって紛糾している中で、最上級生たちが、プールボー校長先生宛に、要望書を提出し、英語「一辺倒」のアメリカ様式の批判と日本文



長谷部 弘(はせべ ひろし) 1955年生まれ。福島市出身。東北大学経済学部 経済学研究所修了後、同学部助手、教養部講師、国際文化研究科助教授を経て、99年に経済学研究科教授。2021年定年退職し、東北大名誉教授。23年4月から宮城学院女子大学学長。専門は日本経済史。博士(経済学)。

化を主とした授業への転換を要求したのでした。

これが退学処分につながったのは、おそらくこの要望書が、女学校の教学体制に関わる厳しい対立問題の琴線部分に触れるような役回りを演じてしまったからでしょう。プールボー女史にとつては、婦人宣教師として負っていた母国の教会の支援者たちへの責任意識が「対立」を生み出したように見えますし、また長年にわたつて教育してきた優秀な女子学生たちが、キリスト教教育の実を結ぶことなく、ナショナリズムに傾斜してしまっただけに對する失望の思いがあったとも考えられます。私には、彼女の学生たちへの指導として、新約聖書のコリント人への手紙13章を何度も読んで自分の立ち振る舞いを神との関わりで考えさせようとした点が興味深い点です(次回最終誌)。